

清見の生産技術体系の確立

第4報 開花時期と果実形質

岩永秀人・松崎重雄・野方俊秀 (佐賀県果樹試験場)

Hideto IWANAGA, Shigeo MATSUZAKI and Toshihide NOGATA : Studies on Cultivation of KIYOMI Tangor

4. Relation between Blooming Period and Fruit Characters

清見の生理・生態についての報告は少なく、不明な点も多く残っている。今回は開花時期の早晩と果実の形質について1981年度から1983年度にかけて調査を行ったので報告する。

1. 試験方法

供試樹および調査果実 1981年および1982年は場内産10~11年生清見を2樹,1983年は場内の高接ぎ3年目(温州中間台)の樹を3樹供試した。着花量は1981年がやや多く逆に1982年は少なく,1983年は並みであった。開花時期は第1表に示すとおりである。調査果は,各年とも開

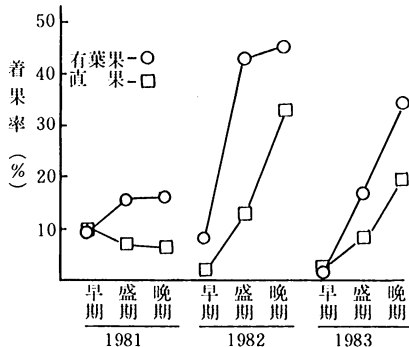
第1表 開花時期(月/日)

年	時期	早期開花	盛期開花	晩期開花
1981年		5/18以前	5/20	5/23
1982年		5/19以前	5/21	5/25以降
1983年		5/11以前	5/14	5/16以降

花時期ごとに有葉花と直花に分けて毛糸でマークし,着果の状態や果実の肥大状況,形質について調査を行った。

2. 調査結果

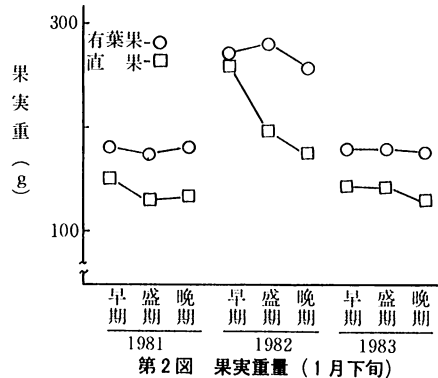
着果率は1982年と1983年で同じような傾向を示し,早期開花に比べ,盛期あるいは,晩期開花の方が実止まりが良かった。しかし,1981年は着花量が多かったためか,開花時期ごとに大きな差はみられず後2年とはやや異なる結果となった。有葉花と直花では,明らかに有葉花の方が実止まりが良かったが,1982年と1983年においては,直花でも遅れて開花したものは,早期開花の有葉花より着果率は高い数値となった。果実の肥大は,10月までは良好であるが,11月以降はやや緩慢となり,12月から1月にかけては逆に縮小した。開花時期別にみると,有葉果では晩期開花果が生育後半に早期開花の玉伸びを上回り,最終的には同等もしくは,大となった。直果は晩期



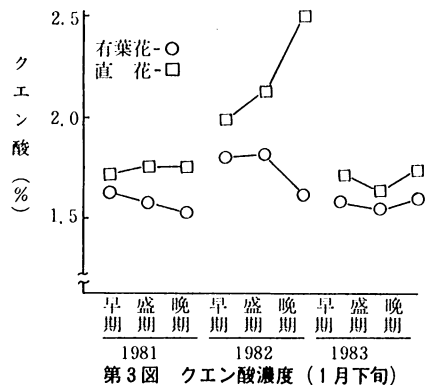
第1図 着果率

開花果がやや小さい傾向にあった。有葉果と直果では,有葉果の方が肥大が良好で,生育の後期になるほどその差は大きくなった。果形指数は横径の大なる有葉果で大きく,10月頃までは増大したものの,その後の変化は各果実とも小さく,開花時期別の差は明らかでなかった。果実重量は,果径と同様,有葉果で大きく,直果は晩期開花で小さかった。果実比重は直果が重い傾向にあったが,開花時期別では明確な差はみられなかった。また,果皮歩合,果汁成分のBrixについても,有葉果と直果,あるいは,開花時期別には差がはっきりしなかった。酸含量は,有葉果が明らかに低く,このため糖酸比は,有葉果で高かった。また,開花時期別には,晩期開花ほど高い酸含量を示し,糖酸比も低く,品質的に劣った。

さきに第2報で着果条件と果実形質の関係について報告したように,着果部位や日当り,果実の向き等の着果条件による品質差は大きく,加えて今回明らかになった結果枝の葉数や,開花時期による幼果時の大きさ等を考慮して摘果を行うことが重要である。



第2図 果実重量 (1月下旬)



第3図 クエン酸濃度 (1月下旬)